

でじたる紙ふうせん

花の巻

氏風船
紙工房



目次



花の名前

三和 すい

2



サボテンの子どもたち

永坂 暖日

4



幸せのカタチ

～隠し子は豆粒剣士番外編～

鳴砂 謙

6



サマーDream

八柳 隆三

9



文字のない恋文

藍川いさな

11

花の名前

三和すい



花の名前

「おーい、桃太！」

教室を出たところで名前を呼ばれた。

ふり返りそうになったけど、おれはランドセルを背負い直すとそのまま廊下を歩いていく。

「ちょっと待てよ、桃太！ 桃太ぁ？」

追いかけてくる声と足音に最初は気づかないふりをしたけど、肩を叩かれ仕方なく足を止める

。

「何だよ、秀一」

「何だよじゃねーよ。無視するなよ」

ムツとした顔の友達に、おれも不機嫌な声で応える。

「お前が名前で呼ぶからだ」

「仕方ないだろう。『渡辺』って名字、他にもいるんだからさ」

これには何も言い返せない。同じクラスにはおれの他にもう一人『渡辺』がいるし、学年で数えれば全部で五人。ついでに言えば、うちの担任も『渡辺』だ。

だから、友達はたいていおれのことを『桃太』と名前で呼ぶ。

けれど、おれは十年近くつき合ってきた自分の名前が大嫌いだった。

理由はいくつかある。その中で一番はやっぱり『桃』という漢字だ。

最初に思い浮かべるのは果物かもしれないけど、花の名前だし、何よりピンク色を意味する字だ。どうしても『女の子』というイメージが付きまとう。

おかげで昔よくやった戦隊物ごっこでは、やりたいヤツがいないとピンク役はたいていおれにまわってきた。

「何でいつもおれがピンクなんだよ」

文句を言うと、

「だって、お前の名前ピンクじゃん」

と返ってくる。

背が低いのを理由にされることもあったけど、名前を持ち出される方がずっと多かった。「敵のザコ役よりいいだろ」と言うヤツもいたけど、おれにとっては女役よりもザコ役の方がまだマシである。

おれが『桃太』と名前で呼ばれるのが嫌になったのは、この頃からだった。

名前で嫌な思いをしたのはその後も何度かあった。最近では授業で書いた作文だ。

『私の歴史』というタイトルで、生まれた時から今までにあったことを書くというものだ。

最低ラインは、原稿用紙五十枚。

それだけの枚数を自分が覚えていることだけで埋めるのは難しいし、何より『歴史』だ。生ま

れた時のことから書かなければならない。

当然赤ん坊の頃のことなんて覚えているわけがなく、みんな家族に話を聞いていた。

例えば、生まれた時にどう思ったかとか、どんな赤ん坊だったかとか。

そして、名前の由来とか……。

おれは自分の名前が嫌いだったけど、どうして『桃太』という名前が付けられたのか、聞いたことはなかった。

早々に作文を書き始めた友達の話では、「健康に育つように」とか「やさしく思いやりのある人になるように」なんて願いがこめられていたり、「読み方がカッコイイから」や「父さんの名前から一字もらった」など、いろいろな理由があった。

(なら、『桃太』って名前には、どんな意味があるんだろう?)

何かすごい理由があるんじゃないかという期待もあったけど、名前に関してはいい思い出がないだけに不安も大きい。

(このまま知らない方がいいんじゃないか?)

一度はそんなことも考えたけど、気になって作文が手につかない。

夕食の後、おれは思い切って聞いてみることにした。すると、父さんはうれしそうに口を開いた。

「それはだな、父さんの名前が『藤彰』で、母さんの名前が『百合子』と、二人とも植物の漢字を使っている……」

「うん。それは知ってる」

だから子供の名前にも植物の漢字を入れようと決めた話は、もう何度も聞かされている。しかも、二人が出会ったのが花屋の前で、初めてデートをしたのが植物園、プロポーズしたのが満開の桜の木の下など、いかに植物に縁があるかという長いエピソード付きでだ。

「だから、何でおれの名前は『桃』なんだよ」

「えーと、それは……」

「それは？」

「……桃太郎、ではなかったはずなんだが」

何やら不吉な言葉に、おれは顔をしかめる。

有名人の名前を子供に付ける親は結構いるらしいけど、いくら有名だからといっても昔話の主人公の名前を付けるのは勘弁してほしい。確かに『鬼退治』は立派なことかもしれないけど。

「桃太郎って、どういうことだよ」

「いや。桃太郎じゃないぞ。それは確かだ」

「だったら何なんだよ」

少しむくれ気味のおれに、父さんはすまなそうに頭をかいた。

「実はな、お前の名前を決めたのは母さんなんだ。だから、父さんは知らないんだよ」

予想外の答えに、おれはあぐりと口を開けた。

普通ならここで母親に由来を聞けばいい。けれど、おれの母さんは五年前に死んでいる。話を聞きたくても聞けるわけがない。

「何で知らないんだよ。母さんに聞かなかったの？」

「お前が生まれた時、ちょうど海外に出張中でな。帰国した時にはお前の名前を役所に届け出た後だったし、母さんが考えて決めた名前だからいいかなと」

父さんの穏やかな表情を見て、おれは口をつぐんだ。

母さんのことはよく覚えていない。

だけど、母さんのことを話す時の顔を見れば、今でも父さんが母さんのことを大切に思っていることはわかる。

その母さんが考えてくれた名前。

それなら理由がわからなくてもいいかな、と思いかけた時、

「それに、何か『桃太』って強そうな感じがしないか？」

……………えーと、父さん。それって、やっぱり桃太郎をイメージしてないか？

消えかけていた不安が胸の中でどんどん大きくなり、おれは身を乗り出す。

「本当に聞いてないの？ 手がかりとかヒントになるようなこととか何でもいいからさ」

「そのぐらいにしておやり」

と言ったのは、父さんの隣でお茶を飲んでいたばあちゃんだった。

「あんたは予定日より二ヶ月も早く生まれたんだ。出張から帰ってこれなかったのも、話し合っただけで名前を決められなかったのも、仕方がなかったんだよ」

「だったら、ばあちゃんはおれの名前の由来、知っているのか？」

ばあちゃんはおれが生まれる前から父さんたちと一緒に住んでいる。それなら母さんから何か聞いているかもしれない。

おれは期待しながら見つめたけど、ばあちゃんは少し額にしわを寄せ、

「私も、はっきりとは聞いていないんだよ。けど、たぶん……」

「あんたが三月三日に生まれたからじゃないの？」

台所から、姉ちゃんが顔を出した。

母親がいないおれの家では、ご飯を作るのはばあちゃん、後片付けは高校生の姉ちゃんの仕事だ。片付けはまだ終わっていないようだけど水の音は止まっている。今の話は姉ちゃんにも聞こえていたようだ。

「桃太の誕生日の三月三日って、ひな祭りでしょう。ひな祭りは『桃の節句』って言うじゃない」

考えないようにしていた可能性をあっさり言われ、おれは口をつぐんだ。

おれも自分の誕生日が「桃の節句」だということは知っている。しかも、冬に生まれた姉ちゃんの名前は「椿」だ。

もしかしてとは思ったけど、そうだとは思いたくなかった。あまりにも安易な付け方だし、何よりひな祭りは女の子の行事だ。男のおれには関係ない……と思いたい。

「桃太。何でひな祭りを『桃の節句』というのか知っているかい？」

落ち込むおれに、ばあちゃんが言った。

「桃はね、厄除けの木——悪いことを遠ざける木なんだよ。子供が病気やケガなどをせず無事に

育つよう桃の木に守ってもらおうと昔の人は考えたんだ。お前の母さんも、そう思ったんじゃないかねえ」

かもしれないな、と父さんもどこか遠くを見つめながら呟いた。

「生まれたばかりの頃の桃太は、本当に小さかったんだ。未熟児だったから当たり前なんだが、周りの子より一回りも小さくてな。ちゃんと育つのかと心配したんだぞ」

しかも三月生まれだしな、と続いた父さんの言葉に、おれは首をかしげた。

「何だよ、三月生まれだからって」

体が小さいから心配する気持ちはわかるけど、三月生まれが理由になるのはわからない。

「同じ学年でも四月生まれと三月生まれでは一年近く違うだろう？ 大人の一年はそうでもないが、子供にとってはかなり大きな差だ。三月生まれの子は、生まれてきたのが遅い分、成長も遅れているんだ」

「そうなの？」

「ああ。例えば赤ん坊の時、桃太が寝返りをするようになる頃に、四月生まれの子はもう歩き始めているんだぞ。体の大きさだって当然違う。他の子と一緒にいるのを見る度に、桃太が小さいのが気になってな。特に運動会で一生懸命走っているのに、体の大きな子に追い抜かれると父さんも悔しくてな……」

言われてみれば、確かにおれの身長はクラスの中で一番低い。だけど、一つ下の学年に行けば、真ん中ぐらいのグループに入るだろう。

となると、大人になれば――例えば高校生ぐらいになれば、おれもみんなと同じぐらいの身長になるのか？ 父さんは結構高い方だし。あ、でも姉ちゃんはかなり低いよな……。

などと重要事項(?)についていろいろ考えていたら、父さんたちはおれが納得したと思っただけらしい。いつの間にか、おれの名前の由来は「三月に生まれて、無事に大きく育ててほしいから」に落ち着いてしまった。

――けど、本当にそれだけなのか？

あの日から、おれはずっと気になっていた。

どうして母さんはおれに「桃太」なんて名前を付けたんだろう。

三月三日に生まれたから？

桃が厄除けの木だから？

いまいちピンと来ない理由に、おれは物足りなさを感じていた。他にも何かあるんじゃないかと考えてみたけど、全然思いつかない。

モヤモヤしたものを抱えながら、おれは十歳の誕生日をむかえた。

「そろそろ桃太も一人部屋にするか」

父さんがそう言ったのは、夕食の時だった。

おれの誕生日ということで、テーブルの上には普段よりもちょっと豪華なおかずが並んでいる。それを口いっぱい頬張っていたおれは、

「やったあー！」

と叫んで口の中の物をこぼし、「行儀が悪い」と姉ちゃんに頭を叩かれた。ちょっと痛かったけど、うれしさにおれの顔はすぐにニヤける。

親と一緒に寝ている友達もいるし、兄弟と同じ部屋のヤツも多い。おれもまだばあちゃんと一緒にの部屋だ。

それが、一人部屋。

おれだけの部屋ができる。

想像するだけでワクワクしてきたけど、

「そうすると、あの部屋を片付けないといけないねえ」

ばあちゃんの言葉に、おれの笑顔が固まった。

うちには余っている部屋が一つだけある。一応普通の部屋だけど、普段使わない物なんかが箱に入れられて山積みになって置かれている。つまり物置部屋だ。おれの部屋を作るとなると、荷物の大部分を処分することになる。

「本当に、いいのか？」

夕食の後、おれは父さんに聞いてみた。

物置部屋にある段ボール箱の多くは、読書が趣味だった母さんの本が入っている。父さんもばあちゃんも本はあまり読まないから、箱の多くはもう何年も開けられていない。

その箱の山を、父さんが時々寂しそうな顔で眺めているのを、おれは知っていた。

「いいんだ」

やさしく笑うと、父さんはおれの頭にポンと手を置いた。

「桃太の部屋を作るんだ。きっと母さんも許してくれるさ」

そんなわけで、次の日からおれの部屋作りが始まった。

学校が終わると、おれは遊びの誘いを断って真っ直ぐ家に帰る。正直言って掃除は嫌いだけど、自分の部屋ができるとなると話は別だ。おれはせっせとゴミ袋にいらぬ物を詰めたり、ホコリがたまった床を拭いたりした。

片付けはどんどん進み、数日後には部屋に残っているのは母さんの本だけになった。

ほとんどの本は段ボール箱に入っているから、そのまま古本屋に持っていけばあっという間に片付くと思っていた。

けれど、部屋の掃除を始めて一週間以上経った今でも、段ボール箱は一つも部屋の外に出していない。それどころか箱の中から出された本が床の上にくっつもの山脈を築いている。

原因は、姉ちゃんだった。

「読んでいないで、手を動かせよ」

「わかってるって」

返事はするけど、床にペタリと座り込んだ姉ちゃんの目は、手にした本から離れない。

その姿に、おれは大きくため息をついた。

姉ちゃんはかなりの本好きだ。休みの日はたいてい居間や自分の部屋で本を読んでいる。父さんの話によると、そういうところは母さんに似たらしい。

母さんの本を処分しようとした時に「もったいないよ」と一人反対したのも姉ちゃんだ。

だけど、本を処分しなければおれの部屋を作れないし、全部の本をしまえるほど姉ちゃんの部屋は広くない。

結局、取っておく本と処分する本を姉ちゃんが分けることになった。

で、この有様だ。

片付けが進んでいるのか進んでいないのか、もはや姉ちゃん以外にはわからない。いや、ひょっとすると姉ちゃんもわかっていないのかもしれない。

それでもおれは、そして父さんやばあちゃんも、姉ちゃんに強く文句を言うことはできなかった。

ここにあるのは、死んだ母さんが好きだった本だ。できれば処分したくない。一冊でも多く姉ちゃんの手元に残って大事にされた方がいいに決まっている。

それに、おれの部屋を本格的に作るのは、春休みに入ってからだ。まだちょっと余裕がある...
...ほんのちょっとだけ。

不安になったおれは、部屋がきれいになった後も、姉ちゃんがちゃんと片付けているかどうか監督することにした。もっとも注意しても姉ちゃんの手は止まったままだけど。

ただ見ているだけの状況に、おれはだんだんと飽きてきた。こんなことなら秀一たちと遊びに行けばよかった。いや、今からでも遅くないか.....と考えていたら、

「ねえ、桃太。これ見てよ」

本を読んでいた姉ちゃんが不意に顔を上げた。

「ほら。こんな本があった」

見せてくれた本は、辞書かと思うくらい分厚かった。そして、ページの間からは色あせた付せんが何枚も飛び出している。

最初は姉ちゃんの参考書が紛れ込んでいたのかと思ったけど、古めかしいデザインの表紙には『花言葉事典』と書いてあった。

花言葉がどういったものなのかは、男のおれでも一応は知っている。花に「愛」とか「やさしい」とか、そういう意味があるというヤツだ。

興味はなかったけど、姉ちゃんは違うらしい。

「椿の花言葉は『完璧な魅力』だって。それから藤には『決して離れない』、ユリには『威厳』とか『清らか』って意味があるそうよ」

「へえ、そうなんだ」

適当に返事をし、おれは部屋を出た。

うちの家族の名前には植物の漢字が使われている。姉ちゃんの「椿」、父さんの「藤」、母さんの「百合」と来れば、次はおれの「桃」だ。どうせ恋愛に関係した、女の子っぽいものに決ま

っている。そんなのは聞きたくない。

「遊びに行ってくる」

おれは階段を駆け降りた。そのまま玄関に直行し、急いで靴をはく。

「待ちなさいよ、桃太！」

姉ちゃんの声が追いかけてきたけど、おれは無視して玄関のドアを開けた。そのまま外に飛び出そうとして、

「あのね、桃の花言葉は『天下無敵』だって！」

思わず足が止まった。

ふり返ると、姉ちゃんが階段の途中にいた。見せるように中を開いた本をおれに向けている。

目は悪くないけど、姉ちゃんが持っている本の字はさすがに読むことはできない。

けれど、色あせた付せんがついたそのページに濃いピンク色の花の写真が載っているのと、赤いペンで何本もラインが引かれているのがわかった。

『生まれたばかりの頃の桃太は、本当に小さかったんだ』

『しかも三月生まれだしな』

前に父さんが口にした言葉が、頭に浮かび上がる。

階段を降りてきた姉ちゃんがニッコリと笑った。

「天下無敵だなんて、なかなかカッコイイじゃん」

「……まあな」

下駄箱の上に置いてあった帽子を、深く被る。頬が熱くなるのを感じながら、おれは家を後にした。

近所の公園に着くと、いつもの遊び仲間が集まっていた。公園の入口を向いていた秀一と目が合う。

「あれ、桃太？ 今日片付けがあるんじゃないのかなかったのか？」

「やることがないから出てきた」

答えると、秀一どころかその場にいた全員が驚いたようにおれの顔を見る。

「な、何だよ」

「だって、『桃太』って呼んだのに、ちゃんと返事するからさ」

「べ、別にいいだろう。それより何してたんだよ」

「ああ。それがさ……」

この日、おれはちょっとだけ自分の名前が好きになった。

<終>

+++++

三和 すい

個人サイト「灰色の世界の片隅で」

<http://plaza.rakuten.co.jp/miwasui/>

サボテンの子どもたち

永坂 暖日



サボテンの子どもたち

陽射しは暖かく、頬をなでる風には春の息吹がある。自室の窓際で日向ぼっこしながら昼寝をするにはもってこいの天気だった。三月も下旬になると、ようやく冬の寒さが緩んできたと感じる。

大輔は読みかけの文庫本を腹の上に投げ出した。眠気に誘われるまま目を閉じ、このまま気持ち良く夢の世界へ旅立とうとしていた時――。

大輔の眠気を蹴散らすような、騒々しい足音が近づいてきた。夢の世界へもう手が届こうという時にドタバタと階段を駆け上る音。夢の世界は煙のように消えて遠ざかる。

「お兄ちゃん、昼寝？」

昼寝しようとしていた大輔をたたき起こした足音の主は、妹の静香だった。静香が自室に行くには大輔の部屋の前を通らなければならず、大輔はドアを開けっ放しにしてある。部屋をのぞき込む妹の方に首だけ向けて、不機嫌そうな顔をして見せた。いや、実際に不機嫌ではあった。

「おまえがうるさいから、目が覚めた」

「あ、そうなの？」

大輔のいかにも機嫌の悪い声を受けても、静香の声には少しも悪びれたところがない。

「もっと静かに階段あがれよ」

「だってまたすぐ出掛けるから」

静香は仕方ないでしょと言わんばかりの顔をするが、それが階段をうるさく駆け上がっていい理由にはならない。

「帰ってきたばかりなのに、忙しいやつだな」

大輔がそう言った時には、静香はもう自分の部屋へ行ったあとだった。

「荷物を置きに一旦帰ってきただけなの。これから送別会第二部に行くよ」

そのためにお色直しでもするのだろうか。部活の送別会だと朝から出掛けていたが、一度帰宅してわざわざ着替えるとは、女は面倒くさいもんだなと思う。

静香のせいですっかり目が覚めてしまった大輔が何か飲もうと思い立って一階へ下りると、階段脇にある玄関で母が色鮮やかな花束の解体作業をしていた。

「どうしたの、それ」

「静香の後輩の子たちが、卒業と大学合格のお祝いにくれたんですって」

なるほど、解体されて広げられた花束のそばにはピンクと白のテープで作られたリボンや、『しずか先輩へ』とかわいらしい字で書かれたメッセージカードが置いてある。送別会の第一部でもらってきたのだろう。

大輔は花に疎いので全然詳しくないが、真っ白で大きな花卉のカサブランカやピンク色のカーネーションくらいは知っている。一種類につきだいたい二、三本といったところだが、種類は多い。なかなか立派なものをもたらしたようだ。

母は不要な葉を切り落としてどんどん花瓶に生けていく。大輔がペットボトル片手に自室へ戻ろうと通りかかった時には、花瓶は靴箱の上に飾られて、余った分は水を張ったバケツに入れら

れていた。

そこへ、先ほどとは違う服に身を包んだ静香が下りてくる。やはりお色直しをしていたのか。

「静香、できたわよ」

「ありがとうーって、そこに飾るの？」

花瓶を見た静香が不満げに眉根を寄せる。

「玄関が華やかになっていいじゃない」

娘が何故そんな顔をしているのか、母には分からなかったらしい。大輔にも分からない。

「だって、隣にサボテンがあるし。見栄えが変」

花瓶の隣には、種類の違うサボテンの鉢が二つ並んでいた。二つともどんぶりくらいの大きさがある鉢で、入れ物より一回りほど小さいサボテンがによっきり植わっている。カラフルな花の隣に濃緑色の刺々しい植物では、見た目に落差が激しいのは確かだ。

母の趣味らしく、ここ寺島家には昔からサボテンが多い。玄関にもいつも何かしらのサボテンが飾ってあるからその光景は目に馴染んだもので、隣に華やかな存在がやって来ても、大輔は特に変だと思わなかった。

「別におかしくないでしょ」

母も大輔と同じに思っているようで、静香の文句には取り合わない。

「えー。せっかく後輩から綺麗な花束もらったのに」

しかし静香は納得できないらしい。

「どうせおまえは三日も経てば花だって見なくせに、文句言うなよ」

見かねた大輔が口をはさむと、静香がきつと睨んできた。

「そんなことないもん」

そんなことあるだろうと思ったが、口には出さず肩をすくめるだけに留めておいた。階段を上ろうとしたら静香に呼び止められる。

「ねえお兄ちゃん。駅まで送ってよ」

たった今まで口を尖らせていたくせに、ねだるような口調にころりと変わっていた。

「いやだ」

「なんでよー」

「送ったら、必然的におまえを迎えに行かないといけなくなるから。自転車で行けよ」

「いいじゃん。どうせ暇なんでしょ」

仕返しなのか、静香は少々嫌みっぽい声で言う。

大学生の大輔は長い春休み中なのだが、そうそう毎日予定があるわけではない。ここ数日はバイトもサークル活動もなく、友人と遊ぶ予定もなかったから昼寝をする時間があっただけで、いつでも暇なわけではないのだ。それに、今日は日曜日だから父だっている。現に居間でのんびりとテレビを見ているではないか。

「お母さんの車、使っていいわよ」

大輔が送るとも言わないうちから、母が余計な口をはさむ。

「じゃ、よろしく」

結局、静香を駅まで送り迎えする羽目になってしまった。

○

花束をもらったのは静香だったが、その後の面倒を見ているのは母だった。

そもそも花瓶に生ける時点で母に任せていた静香が水替えをするわけもなく、大輔の予想通り三日も経てば花とサボテンのことはすっかり気にしていないようだった。

あれから一週間、ますます春は歩み寄ってきている。

母が、靴箱の上に置いていたサボテンを庭の日当たりの良い場所に移し、代わりにつぼみをつけているサボテンを花瓶の隣に持ってきた。『小町』という名前の全体的にずんぐりむっくりと丸く、意外にも大きく綺麗な花を咲かせるサボテンである。今はまだつぼみだが、開花すれば隣の花々に見劣りはしないだろう。

だが、サボテンが入れ替わっていることに静香が気づいたかどうかは定かではない。大輔がふと見かけた時、静香は靴箱の上には目もくれずに靴を履いてさっさと出掛けてしまった。今日は自転車で行くらしい。

運転手をせずに済んだかと思っていたら、庭から静香の騒ぐ声が聞こえてきた。

何事かと庭に面した居間の窓から見てみると、庭の片隅にある自転車置き場から中途半端に自転車を出した状態で、静香がしきりに自分のふくらはぎあたりを気にしている。

「どうしたの？」

母が居間の窓を開けた。

「ストッキングが伝線しちゃった」

静香は恨めしそうな声で答え、自転車置き場のそばにあったフラワースタンドを指さす。階段状に三段あるフラワースタンドにはサボテンばかりが並んでいて、どうやらその一つに足を引っ掛けてしまったらしい。

母が「あらあら」と言っている間に静香は家の中へ戻ってきて、この前よりも更に騒々しく階段を駆け上がっていく。足音から察するまでもなくご立腹だ。「約束の時間に遅れる」だの「あんなところに置いてなくってもいいじゃん」だの「サボテン多すぎ」だの、独り言のような愚痴を聞こえよがしに言っていた。

自転車置き場周辺は特に日当たりが良い。フラワースタンドはその脇にあった。サボテンがそこに並んだのは暖かくなってきたこと最近のことだが、今年になって急にフラワースタンドが現れたわけではない。静香の愚痴は単なる八つ当たりだ。

「暖かくなってきたし、日光を当ててあげたかったのよ」

母は困ったような笑みを浮かべて大輔に言い、それから父を見た。静香があれだけ騒いでいるのに、父はさっきから黙って新聞を読み続けている。サボテンは母の趣味だが、父は挿し木などの手伝いを時々していた。

ストッキングを履き替えた静香がやほりにぎやかに階段を下りてくる。また送れと言うつもりじゃないかという不安がよぎるが、今日は約束に遅れそうでも自転車で行くらしい。いかにも

慌てた様子で自転車を道路へ押し出し行ってしまった。

「場所を移そうか。大輔、ちょっと手伝って」

静香を見送ったあと母にそう言われたので、一緒に庭へ出た。

フラワースタンドに載っていたサボテンを一度全部棚から下ろし、自転車置き場から少し離れた、しかし日当たりは良い場所へ移動させた。下ろしたサボテンを再び棚へと並べていく。上の段には比較的小さな鉢植えを置き、下の段へいくほど鉢植えのサイズは大きくなっていく。

恐らくすべての種類の名前を一度は母から聞いたことがあるのだが、とても全部は覚えていない。それだけ我が家にはサボテンがあるのだ。

一通り並べ終えたあと、母は鉢の向きや間隔を微調整していく。

「うちってサボテンが多いよな」

その様子を後ろから眺めていた大輔が言うと、母は手を止めて振り返った。

「別に文句があるわけじゃないよ。ただ、改めて見ると多いなあと思って」

多すぎると八つ当たりを口にしていた静香の味方をするつもりは毛頭ない。サボテンは母の趣味なのだから。庭を見回せばフラワースタンドは居間の窓近くなどにもいくつかあるし、地面に直接置いてある鉢もある。同じように棘のある植物でも姿形は様々だ。

「まあ、多いわね。お母さん、すっかりサボテンにはまっちゃったからね」

「何かきっかけでもあったの？」

すると、母は思い出し笑いでもするような表情を浮かべる。

「きっかけはね、お父さんなのよ」

と、母は居間を見る。父は相変わらず新聞を読んでいるようだった。

「昔、お父さんが誕生日にプレゼントしてくれたの。今、玄関に置いてある『小町』っていうサボテンを。あ、あれはその当時のサボテンじゃないけどね」

「へえ。それは初耳だな」

父は無口で家でもあまり喋らないから、そういう話はまずしない。そして、泊まりがけの出張に行っても土産を買ってくることは稀だ。そんな父がプレゼントを贈ったことがあるなど、驚きの事実である。

「しかもね、初めてのプレゼントだったのよ」

「初めて？ で、サボテン？」

若かりし日のこととはいえ父が誕生日プレゼントを贈ったことにも少なからず吃驚したというのに、その中身がサボテンとは重ね重ねに驚いた。しかしそれよりも、父のプレゼント選びのセンスを少々疑う。サボテンとはいかがなものだろう。

形状は様々で『小町』のように綺麗な花を咲かせるものもあるが、サボテンたちはどれも鋭い棘に覆われている。初めて女性に贈るのにふさわしい植物とは大輔には思えないし、思いつきもしない。

「驚いたでしょ」

おかしように笑っているが、母はサボテンをもらった時どんな気持ちだったのだろう。父とはこうして家庭を持ってあまつさえサボテンにはまっているのだから、結果オーライではあるの

だが。

「……呆れた。俺でもせめて花をあげるけど」

「へえ、そうなの？ あげたことあるの？ それともこれから？」

母が興味津々といった表情を浮かべる。

「誰にどんな花をあげるの？」

「別に、あげる相手なんていないよ」

口を滑らせてしまったと内心で焦った。母とはいえ女の勘は鋭い。しかも根掘り葉掘り聞き出そうとするから困りものだ。

「あらそう？」

「そう」

「あげるなら、分かりやすい花がいいわよ。やっぱり」

母はあげること前提で言っているが、下手に否定ばかりしていると追及の手が止まなくなるので適当に話を合わせることにした。

「何だよ、分かりやすい花って」

「花言葉よ」

「そういえばあるね、そんなの」

「サボテンにもあるのよ。知ってた？」

「いや。花じゃないのにあるんだ」

「あるのよ、それが。お母さん、もらった時はそれを知らなかったから、なんてものくれる人なんだらうって呆れたわねえ」

昔日を懐かしむような目をしている。花以外にも花言葉があるのは初耳で、サボテンの花言葉が何というのか気になった。だが、それはそのまま両親の若かりし日の思い出話に繋がるので、訊くのは気恥ずかしい。

「へえ、そうなんだ」

「そうなのよ。ふふ、久し振りに思い出しちゃった」

「……だいたい終わったし、俺、戻るわ」

放っておいたら放っておいたで母が思い出話を始めそうだったので、大輔は手伝いは終わったとばかりに手についた埃を払い落とし、逃げるようにして家の中へ入った。

その大輔と入れ違いに、新聞を読み終えた父が草履を履いて庭へ下りていく。母の手伝いでもするのだろうか。

自室へ戻り、パソコンを立ち上げる。母の口から直接というのは決まりが悪いので遠慮したが、サボテンの花言葉が気になっていたのだ。

インターネットに接続すると早速『サボテン 花言葉』で検索する。思っていた以上の数がヒットしたので、ひとまず検索結果のトップにあがったページをのぞいた。

燃える心、内気な乙女、秘めた熱意、枯れない愛など、サボテンの見た目に由来していそうな言葉もあった。

母に『内気な乙女』という言葉は当てはまりそうにないから、サボテンを母に見立てたわけで

はあるまい。きっとそれ以外の言葉の代弁者として、父はサボテンを贈ったのだろう。

父がプレゼントを贈るのは意外だったが、たとえば赤いバラなどではストレートに過ぎるし買うのが恥ずかしからう。よく考え抜いた結果がサボテンというのは、無口な父らしいと思った。

大輔の頭に、とある顔が浮かぶ。呆れるくらいに鈍くてそそっかしいから目の離せない大学の同期生。

同じ棘があるにしても、大輔ならば断然バラを選ぶ。

彼女の誕生日に花束を贈ったらどんな顔をするか想像してみようとしたが、真っ赤なバラの花束だったところで鈍い彼女のこと、その裏に隠れている大輔の想いに気がつくことはないだろうという予想の方が先に立ってしまう。

サボテンなど贈ったら生涯に渡って気づかれない可能性すらありそうだと、一人で苦笑した。

<終>

+++++

永坂 暖日

個人サイト「夢想叙事」

<http://www.geocities.jp/musohjoji/>

幸せのカタチ

鳴砂

謙

（隠し子は豆粒剣士番外編）



【登場人物】

大友美桜花(みおか).....ある事件で小人達と出会った女子高生。(愛称：ミヨ)

【呪いをかけられて小さくなった人達・成人でも身長5センチ程度。】

マサツネ.....剣術が得意な初老の小人。武器は縫い針。

獅子丸(ししまる).....やんちゃな男の子。養育係の美桜花を困らせる存在。

キッチョム.....口先だけの青年。ところが今回の物語では...？

瀬尾.....すっきりしないことが大嫌いな女性。

あらすじ

高校生になった私は、ある日、体長五センチにも満たない小人と出会った。一人は過去の記憶を失った初老の男・マサツネ。もう一人は産まれて間もない獅子丸。泣きだす赤ちゃんをあやししながらマサツネは警告する。

「私達と関わればあなたも命を狙われますよ」

その言葉に戸惑う私は、けれど、お腹をすかせて泣く赤ちゃんを見捨てることなどできず、彼らを守ることを決意した。

それから一ヶ月が過ぎた頃、勝手に一人旅をしていたマサツネが新しい仲間を連れてきた。キッチョムと瀬尾だ。プライドの高い少年と少女は些細なことでぶつかり合っていたのだが.....。今回は、そんなキッチョムと瀬尾の物語である。

夕食を終えた私は、小人達の食事を持って自室へと戻った。

「お待たせー」

勉強机に皿を置いて小人達を呼ぶと、本棚から瀬尾とキッチョムが、ぬいぐるみの後ろから獅子丸を背負ったマサツネが出てきた。

「おなかすいたでしょう」と問いかけると、マサツネは「はい」とうなずいて机の上に飛び移った。ところが、キッチョムと瀬尾は無言のまま本棚のへりに突っ立ったまま動こうとしなかった。いつもなら真っ先にキッチョムが駆け寄ってくるのに、どうしたのかと思っていると、「食事の前に聞いて欲しいことがあるんだ」

いつになく真剣な顔でキッチョムが話を切り出してきた。

「どうしたの、改まった顔をして」

「俺達、ケッコンすることにしたから」

「……………？」聞き慣れない単語に私は首をかしげた。

血痕……は違う。結婚……。

「「結婚!？」」

驚声がマサツネと共鳴した。あの冷静沈着なマサツネもビックリしたらしい。

「キッチョムと瀬尾さん……結婚するんですか？」

一瞬、どこまで本気なのか疑った。それほどふたりの仲は良好とは呼べなかった。むしろケンカしない日が一日としてあったかどうか……。

だが、虫と間違えられてキッチョムが殺虫剤を浴びた事件で、瀬尾が殺虫剤の煙に飛び込んで彼を助け出し、それがきっかけで仲が深まってキスしていたのも事実で、ふたりの目は本気だった。

「お……、おめでとう！」

胸中の心配はとりあえず横に置き、お祝いの言葉を述べた。

「め、めでたいことだ。本当にめでたい」

マサツネも出遅れを挽回するかのよう激しくうなずいている。

「おめでとお！」

雰囲気に乗って獅子丸がおおはしゃぎだ。

キッチョムと瀬尾は照れた顔でお互いを見てうなずいた。やはり本気で夫婦になるつもりのような。ケンカばかりしていたふたりがお互いを一生のパートナーに選んだことが、じわりじわりと驚きや喜びを運んできた。

私も恋愛には興味が絶えない年頃だ。なんだかわくわくしてきた。

「そうだ。結婚式はどうするんですか？」

「結婚式？」

キッチョムが首をかしげ、首を横に振った。

「そんな仰々しくしなくたっていいじゃないか。ミヨさんだって忙しいだろうし、第一恥ずかしい」

「私は大丈夫ですよ。ねえ。瀬尾さんはやりたいですよ結婚式」

「そうね。一生に一度のことかもしれないし……」

「かもしれないってなんだよ。一度だけに決まってんだろ」

「キッチョムさんは黙っててください。それで、和式と洋式はどちらがいいですか？」

そうね、と考え込み、「洋式……、でも、和式も捨てがたいわ」

「両方！ いいですね！ やりましょう！」

「おいおい、どれだけ手間がかかると思ってるんだ。ドレスとか白無垢はどうするんだ。それに祝ってくれるのはミヨさんと、マサツネと、獅子丸だけじゃないか。これじゃあ子供のママゴトと同じだ。そんな事をするぐらいなら呪いを解く方法を探すほうが有意義だ。マサツネだってそう思うよな？」

「こういった事は女子に任せるのが一番であろう」

「に、逃げたな」

キッチョムが不服そうな態度をとり続けるので、瀬尾がムツとしていた。

さすがに私も怒った。

「キッチョム。結婚式はね、女の子にとって大切な儀式なんだよ。それを嫌がるなんて瀬尾さんがかわいそうだよ」

「嫌がってるわけじゃねえよ。ただ、そんな事をするぐらいなら解呪の方法を探すほうがマシだって言ってるんだ」

キッチョムは小さな両手を見詰めて言った。彼が焦る気持ちも分からないではなかった。呪いをかけられた小さな身体では危険が多すぎるのだ。

たとえば猫にしてもそうだ。普通の人間は「かわいい」と思うかもしれないが、猫はすばしっこいネズミさえも補食する獰猛なハンターで、小人達にとっては命をおびやかす天敵となる。実際、彼らは猫に狙われて命からがら逃げ延びた経験があった。同様にカラスも危険だし、そういった動物意外にも、先日は私の父がキッチョムをゴキブリと間違えて殺虫剤で殺しそうになった。そして何より、どんな作用を引き起こすかわからない呪いが彼らを不安にさせていた。元の身体に戻ることはみんなの悲願だった。

でも、

「確かに呪いを解く方法を探すのは大切だよ。だけど、今は手がかりが無くて動けない状態じゃない。結婚式はきつとした方がいいと思う。キッチョムも、瀬尾さんの夫になるんだったら、瀬尾さんの気持ちをもっと汲んであげていいと思う。せっかく夫婦になるんだから、ふたりの幸せを探してほしい」

「……」

キッチョムは、黙りこくった瀬尾の不満顔を見て苦い顔をしていたが、諦めたように言った。

「俺が悪かったよ。結婚式はやる。だからそんな顔すんなよ」

瀬尾を抱きしめながら言うと、瀬尾はしばらく許すべきか考えていたようだが、最終的には肩の力をぬいて「ええ、私も悪かったわ」と謝った。

「これは……いつもと違いますな……」

意外にあっさりとは終結したのでマサツネが驚いていた。私も同感だ。今までは過ぎていく時間

だけがふたりの不仲を緩和していたのだが……、これが愛のチカラなのだろうか？

とにかく、夫婦になりたいと思っているのは事実のようだ。あれほどケンカしていたふたりが互いのことを考えている。それはとても喜ばしいことで、全力で応援したいと思った。

こうして結婚式の準備が始まった。まずはインターネットで式の流れや仕来りを調べ、みんなで話し合いながら必要な物をリストアップしていった。ウェディングケーキは苺のショートケーキで代用するとして、あとは衣装の問題だった。さすがに体長5センチしかないウェディングドレスや白無垢はおもちゃ売場や人形店にも置いてあるはずもなく、最終的に手作りしかないということになった。なので、学校帰りに隣町の手芸専門店まで自転車を走らせて買いに行った。

その店は街中に建つビルの二階に、百円ショップと並んであった。さすが専門店というだけあって、店内にはところ狭しと手芸用品が並んでいた。カラーバリエーションに富んだ毛糸から、ビーズ、フラワー、服飾材料、画材・額縁、e t c……。それに、探し求める服の生地も種類が豊富で、無地、プリント、チェック、コットン……とにかく多くて目移りした。しかし、求めているのは結婚式の衣装生地だ。

キッチョムの衣装生地と白無垢の生地はあっさりと決まったのだが、ドレスの生地選びは難航し、店内に入ってからすでに三十分が経過していた。

いつもはしゃいでうるさい獅子丸はバッグの中で眠り、マサツネは瞑想をしてリラックスしていたが、バッグの端に腰掛けるキッチョムは女の服選びを待つのが苦手と見え、だんだん落ち着かなくなって貧乏揺すりを始めていた。

瀬尾は四つあった候補から二つに絞り込んでいたが、

「どちらにしようかしら……」

「なんでそんなに迷うんだよ」

悩む瀬尾の横で、辛抱できなくなったキッチョムが言った。もちろん、店内の人間に気付かれないように小声だ。

「どっちも同じじゃないか」

「全然違うわよ。手ざわりとか、光沢も違う」

はあ？とキッチョムの眉間にしわが寄った。

「ほとんど変わらないだろ。どっちでもいいじゃないか」

「良くないわよ。だって、一生に一度だもの……」

しおらしくうつむく瀬尾がよほどかわいく目に映ったのか、キッチョムは文句を言うにも言えず、それを呑み込むしかなかった。

「ああ、もぉー」

髪をくしゃくしゃに搔きむしったかと思うと、並べられた生地の間はずいと出た。

「わかった。俺が選んでやる」

ペタ、ペタと小さな手で生地をさわり、

「こっちだ、こっち」と右の生地を選んだ。だが、瀬尾は何事も自分で決めたがる性格だ。反射

的に「どうかしら」と首をひねり、「私は左の生地のほうが……」と反論しかけ、そこで急に言葉を濁した。

「……ごめん。せっかくあなたが選んでくれたのだし……」

「いいよ。好きな物を選んだ方がいい。そっちでいいじゃないか」

そんな言葉が返ってくるとは思っていなかったのだろう、瀬尾はまばたきをして、それから申し訳なさそうに「ごめん」と謝った。

キッチョムはうなずいて私のバッグへと戻っていき、奥に姿を消した。

その姿が無理をしているように見えた。瀬尾もそう感じたのだろう、気まずげな様子だったが、それを隠して振り返った。

「ミヨさん、これをお願いします」

「う、うん」

うなずきつつ、瀬尾に何か言葉をかけようかと思ったが、いい言葉が見つからなかった。なんだか悶々とした気分で生地を買い、店を出た。

その後もキッチョムと瀬尾は言い争いをしなかった。

口論になりそうな火種は何度もあったが、キッチョムがあっさりと身を退くので、場が白けて鎮火してしまうのだ。瀬尾は何か言いたげな顔をするが、我慢するキッチョムを見て、それ以上は何も言えなくなった。

言い争いをせず、相手に譲歩することは悪いことではない。けれどそれが続くと、いつしか互いに遠慮するようになり、無言の時間が増えた。ふたりとも幸せになるために努力しているはずだった。それなのにうまくいかない。

私はだんだん心配になり、何とかしなければと思い始めていた矢先、瀬尾の我慢が限界に達した。

「いい加減にしてよ！」

怒鳴り声はかすれ、悲痛な叫びにも聞こえた。

休日で家族は買い物に出かけており、家には私と小人達だけだった。ひさしぶりに家を自由につかえることもあり、瀬尾とキッチョムをリビングへと呼んでブーケに使える花をインターネットで探していたのだが、『花なんて綺麗だったらどれでもいいじゃないか。お前の好きな花を選べばいい』と言ったキッチョムに対し、瀬尾が切れたのだ。

「どうしてそんなに他人任せなの！ やる気はあるの!？」

責める瀬尾にキッチョムも目をむいて怒鳴り返した。

「他人任せだと!？ ふざけんな！ 俺が選んでやった生地を選ばなかったくせに！ そんな事になるくらいだったら最初からお前一人で選べばいいんだ！」

「あ、あの時は……」瀬尾が口ごもる。

キッチョムは、ふんっと鼻を鳴らした。

「お前が式をあげたいって言うから手伝ってやってるのに、どうしてそれがわからないんだ」

「手伝う？」

オウム返しに聞いた瀬尾がキッと睨んだ。

「手伝うって何よ！ 私達の結婚式でしょ！？わかった。そんな気持ちでいられるぐらいなら、あなたなんかを手伝ってほしくないわ！ どこかへ行きなさいよ！ 好きなように遊んでいればいいでしょ！」

「こ、この.....」とキッチョムは握り拳をつくったが、「ああ、そうするよ！ そうすればいいんだろ！」机からぴよんと飛び降りて去っていく。

「ちょ、ちょっとふたりとも！ キッチョム待って」

呼び止めるが止まる気配はなかった。

瀬尾も、不愉快極まりないといった顔でそっぽを向いている。

相手を気遣って抑えてきた怒りが、完全に裏目に出てしまったようだ。

「誤ったのかもしれないわ。彼を夫にするなんて」

ぽつりとつぶやいた瀬尾に、私はドキリとした。

「そ、そんなこと言わないでくださいよ。せっかく結婚しようってふたりで決めたのに」

瀬尾はうんざりしたように首を振った。

「あの人とうまくやっていく自信がないの。もともと頼りない男だし、いきなり結婚とか考えてなかった。でも、断り切れなかった。.....あの場の雰囲気流されてしまったのかもしれないわ」

「キッチョム、どこにいるの？」

しばらくして私は自室に戻り、彼を捜していた。机の上に姿は見え、本棚に作った小人用の寝床には昼寝中のマサツネと獅子丸しかいないので、きょろきょろとした。どこに行ったのかと心配していると、ベッドの枕元に置いた目覚まし時計の陰に、他のぬいぐるみと紛れるキッチョムを発見した。

「そこにいたの」

私は安堵したが、彼は体育座りの状態でうつむいていた。瀬尾とけんか腰の言葉をぶつけあったことで後悔しているようだ。彼は自分の膝を見詰めながら言った。

「恥ずかしいところ、見せちゃったな.....」

「そんなことないよ」

「.....ブーケは決まったのか？」

私は首を横に振る。

「それどころじゃなくて」

「.....そうだよな」

「ねえ、キッチョムは瀬尾さんのことどう思ってるの？」

「そんなの、好きに決まってるだろ」

答えは分かりきっていたが、本人の口からそれを聞けてホッとした。

「うん、そうだと思ってた。だから、瀬尾さんのために我慢してたんだよね」

「……」

「結婚式、キッチョムは嫌い？」

「嫌いじゃねえけど、改まってすると、なんか恥ずかしくて」

『結婚式は何のためにあるのか考えたことはありますか？』

第三者の言葉に、私もキッチョムも驚いて顔を上げた。本棚の上にマサツネの姿があった。彼は身軽に飛び降りると、キッチョムの前に降り立った。

「キッチョム殿は結婚式の意義について考えたことはありますか」

「それは……婚姻を確認するためじゃないか？」

「正解です。では、結婚披露宴については？」

「……親族とか友達に結婚したことをお披露目することだろ」

「どちらも正解です。しかし、それは外向きの話です。結婚する当事者にとってはどうでしょう？ 誰かに祝ってもらうことで『この人と本当に結婚するのだ』『これから結婚生活が始まるのだ』という気持ちの整理にもつながります。儀式とはたいていそういうものです。入学式、卒業式、成人式、そして葬式……。儀式とは気持ちを整理し、次に進むためにあるのではないのでしょうか」

マサツネの言葉には、私にも強く共感するものがあつた。

「マサツネさんの言う通りだよ。瀬尾さんも、キッチョムと一緒に式をつくりあげることで気持ちを整理させたいんじゃないかな？ だから他人事みたいに手伝うと言われて怒ったんだと思う」

「そ、そうだな……」

さすがにキッチョムも反省し、何かを吹っ切ったようにバツと立ち上がった。

「俺、あいつと一緒にブーケを選んでみる。でも、花のことはよく分からないから手伝ってもらえないか？」

「もちろん」

私は笑顔でうなずいた。

瀬尾はまだ結婚に迷いがあるようだった。しかし、キッチョムと一緒にブーケを選ぶことは承諾してくれた。私はパソコンの前に座り、ネットを開いた。

ブーケ選びの基準として、まずは大きさから調べた。なにしろ花嫁は体長約四センチ、新品の消しゴムと同じぐらいの大きさしかないのだ。彼女が持てる花となると小さい物に限られてくる。調べてみて候補にあがったのは、

ノヂシャ、ハナイバナ、スズラン、コメツブツメクサ、キュウリグサ、勿忘草、ハゼラン、キンモクセイ、ヨモギ……

「ヨモギはやめましょ。いい思い出がないわ。それに、あまり見た目のいい花ではないわ」

完全に嫌がる瀬尾にキッチョムも「同感」と言う。

「じゃあ、ヨモギは却下ね。次はノヂシャを調べてみましょうか」

花の画像と詳細なデータが掲載されたページを開いてみる。

「ノヂシャはかわいい花だね。あ、花言葉も載ってるよ」

「花言葉？　どんな？」とキッチョム。

「えーと、『粘り強い性格』……」

私はしばし考え、「これは、ちょっとないかな」

「そうね……」と瀬尾も気のない返事で同意。

「次はハナイバナ。あ、ハナイバナもかわいいね。花言葉は『小さな親切』『愛しい人へ』。

わあ、なんだか結婚にぴったりだね。ふたりはどう？」

「アリだと思う」と、キッチョム。

「瀬尾さんは？」

「え、ええ、いいと思うわ……」

結婚への迷いを拭いきれないのか歯切れが悪い。彼女の悩みばかりは私にはどうしようもなかった。せめて暗い雰囲気だけはしないようにわざと元気な声で、「わかった。ハナイバナを候補にっと。次はスズランだね」

カタカタとキーボードを叩き、スズランの画像を検索する。芳香剤の香りとしても有名な花だけあって、私もよく知っている丸いカタチの可憐な花だ。ヨーロッパではそのカタチから『聖母の涙』とも呼ばれているらしい。しかし、

「『害虫から身を護るために根や茎にはかなり強い毒がある。誤って口に入れてしまうと、胸痛・痙攣・呼吸困難・心不全をひきおこす危険性がある……』。けっこう怖い植物だったんだね。これはやめとこうか？」

「そうね……怖いわね……」

覇気のない瀬尾の言葉にうなずいてページを閉じようとした時だ。

「待ってくれ！　花言葉も見せてくれないか」

「花言葉？」

不思議に思ってキッチョムを見詰めると、彼もまっすぐ見詰め返していた。

「下の方に見えたんだ。さっきの画面に戻してくれないか」

言われるまま画面を戻すと、花言葉が掲載されていた。キッチョムがどうしても見たいと言ったスズランの花言葉。その清らかさに私は息を呑んだ。

『純潔』

『純愛』

『意識しない美しさ』

『幸福の訪れ』

キッチョムが瀬尾を振り返る。

「この花はだめか……？　俺は、この花がお前にぴったりだと思うんだ」

「それは……私への当てつけ？」

その言葉にキッチョムと私は面食らった。

「ど、どういう意味だ」

「だってそうでしょ。スズランに毒があるように、私にも毒があるって言いたいんでしょ」

「まさかそんなことは……」

口を挟もうとした時、「待ってくれ」とキッチョムが小さな手で私を制した。

「ミヨさん。これは俺達の問題だ。今は黙っててくれないか」

「う、うん……」

うなづくことしかできなかった。それほどキッチョムの目が真剣だった。

キッチョムはまっすぐな眼差しで瀬尾を見詰めた。

「確かに、お前には毒があるよ。人の傷つくようなことをずけずけと言う女だとは思う。だけど、俺にとってはかわいいんだ。このスズランのように」

「な、なによ急に」

「あの時のこと、覚えているだろ？ 殺虫剤をかけられて俺が死にかけた時、助けに来てくれて、何度も何度も声をかけながら身体についた毒を洗い流してくれたよな。普段はツンケンしているくせに、俺のために泣きそうな顔になってよ……そんな顔されたら好きになっちゃうだろうが。それにあの時だってそうだ」

ふたりの思い出を暴露していくキッチョム。瀬尾はみるみる赤面し、反論しようとするが、頭がのぼせて思考が追いつかないのか、口をパクパク動かすことしかできないでいる。キッチョムはキッチョムで、自分の世界に陶醉したかのように瀬尾の恥ずかしい話をぶちまけていく。

「俺に告白しようとしてなかなか言えなかったあの時のお前、すごくかわいかった。このスズランよりも、何倍も、何万倍も、かわいかった。あの時のお前をこれから何度も抱きしめたいと思った」

「ば、馬鹿っ、何を言い出すの！ いま言うことじゃないでしょ！」

顔を紅潮させた瀬尾がようやく言葉を口にした。キッチョムは首を横に振った。

「これは、いま言うことなんだ。俺が思っていることを、俺が思っているままを、お前に伝えたいんだ。隠し事は無しにしよう。俺達は幸せになるんだ。そうだろ？」

「……当たり前でしょ。そうじゃなかったら結婚なんかしないわ」

瀬尾は強がるように言ったが、その瞳には涙が浮いていた。

『6月30日

私達はささやかな結婚式を開いた。

瀬尾の花嫁姿に真っ白なスズランはよく似合っていた。』

それから数日後。私の部屋ではふたりの怒鳴り声が響いていた。

「あれはキッチョムのせいでしょ！」

「ふざけんな、俺だけじゃないだろ！」

ふたりは自分の気持ちをぶつけあっていた。酷いケンカだ。

でもそれが、ふたりにとって幸せのカタチなのかもしれなかった。

<終>

+++++

鳴砂 謙

個人サイト「不死鳥の玉子」

<http://www.geocities.jp/myzoukin/>

サ
マ
ー
ド
リ
ー
ム

八
柳
隆
三



0

三月。「溶けない雪だるま、北海道に現る」というニュースがお茶の間に流れた頃、ボクは図書館でドストエフスキーの「罪と罰」を読み始めた。新訳ではなく、重たい全集に収められた鈍器である。どうも、読むのに時間が掛かりそうだ。

四月。ラスコーリニコフが金貸し婆の頭を「オレがガンダム(打ち消し線)(正義)だ」と斧で断ち割っている頃、ついに札幌大学が「溶けない雪だるま」の研究に乗り出したと新聞の三面記事に載っていた。

五月。娘を娼婦に売り渡した飲んだくれボンボヤジが「助けて下さい！」と叫びながら馬車に轢かれて死んだ頃、「溶けない雪だるま、溶ける！」というニュースが新聞の隅に、訂正情報と共に小さく載っていた。

八月。ラスコーリニコフが刑事のポルフィーリーに「愛は地球を救う」と自首を促されている頃、ゆうメールでボクに一個の紙風船が届けられた。その紙風船には何やら黄色い汁でこう大書されていた。

『きみの助けがいる』

――こんな「手紙」、送ってくる友達(馬鹿)は幸いにして一人しかいない。

ボクは放蕩息子ならぬ放蕩夫婦の、放任主義きわまってもはや居所すら定かではない阿呆どもに代わり、仲が良くてノリも良いご近所に住む佐藤さんとその飼い犬であるゴン太を頼り、「罪と罰」を延滞しつつ北海道へ飛んだ。

「佐藤さん。どうにも最近は暑いですね」

「暑いよねー、なんとかしてー。ゴンもぐったりしちゃってさー」

「太陽ばかりはどうにもなりません、ちょっと北海道に行きませんか？ 実は札幌の外れに住んでいるウチダからお呼びが掛かりまして」

「んー、いいかもー。お姉さん賛成」

「じゃあチケットは僕が手配しておきますので」

「よろしくー」

こんな感じで、三時間後には空港でした。

飛んで来たは良いのだが、いかにも北海道は広すぎる。

着いた頃にはもう夜中で、いきなり途方に暮れたボクを佐藤さんがジンギスカンに誘った。

「とりあえず肉食べれば良いことあるってー」

とても、うら若い女性の肉(羊)を貪り喰らうような気分ではなかったが、佐藤さんは大切な財布である。機嫌を損ねるわけにはいかない。渋々、仕方がないというようにボクは頷いた。

空港からタクシーで街に下り、犬同伴でも良いジンギスカン屋なんて何処にもなかったのも、人の良さそうなおっさんに佐藤さんが優しくお願いし、どうせなら高い肉を食べましょうとダックスフントの紛い物である「ゴン太」とタッグを組み佐藤さんに酒を勧め「まあいっかー」の言質を取り店主に、べっぴんのうら若い乙女(羊)の肉を所望して三人(内犬一匹)で頭から尻の穴まで貪り喰らうと慣れぬ遠出の疲れか何だか眠くなってきたので、店を出て暇そうな安宿を見つけるや部屋に転がり込んで眠りに落ちた。

翌日。前日にしこたま肉を喰らった所為か、どこかツヤツヤしている佐藤さんに「あまり人に知られていないパワースポットがあるのですが、そのちょっと手前にウチダの家があるのでちょっと寄っていきましょう」とレンタカーを借りて貰い、ボクらはウチダ君の家へと向かった。

ウチダ君の両親はウチの両親と比べると幾分まともだが(何せちゃんと働いているのだ)、それでも家に帰ってこず子供をほったらかしている点では似通っている。

かつてボクらがまだ小学生で、同じ学校に通っていた頃。ボクらは殆ど毎日一緒にいたけれど、ついで彼の両親を見たことはなかった。そのため、ここを訪ねることはあまり気が進むことではないのだが、他に何の手掛かりもなく、「今日はカニを食べよう」と食い倒れ旅行を画策する佐藤さんにこれ以上ひっ張られぬ為にも、とにかく動いてみるしかなかったのだ。

ウチダ君の家の住所は、何度も手紙を出しているからしっかりと覚えている。あとはカーナビに導かれるまま、広大な平原の中にぽっかりと佇むウチダ君の家を見つけた。ずいぶんと特異な場所にあるのに、昔タヌキと一戦交えて奪い取った埼○ニュータウン辺りに幾らでもありそうな、こぢんまりした造りの家だった。

いくらでもある空き地に車を止め、ボクらはウチダ君ちの玄関へと立った。表札に、ちゃんと内田と書かれていることを確認し、わずかな緊張を押し殺しながらインターフォンを押した。

ぴんぽーん、とこれまた無個性な音がする。そのまま三十秒ぐらい、ボクらは無言だった。

「出ないねえ。お留守かなー」

佐藤さんが言う。ボクも同じように思った。インターフォンに出ないだけでなく、ちゃんと設えた駐車スペースがあるのに車が見あたらないのだ。

とはいえ、ここの他に手掛かりはない。ボクは少し自棄になってもう一度インターフォンを押した。

「留守で一す」

と声がした。

「やっぱり留守だって」

と佐藤さんが言う。

「じゃあ仕方ありませんね」

肩をすくめ、止めた車へと踵を返したボクと佐藤さんの前に、ゴン太が器用に立ちふさがった。ガォオン、と犬のクセに猫科の大型獣のように吠える。それを聞いてヒト科なのにイヌ科の言語が判る佐藤さんが、

「え、後ろ？」

とふり向き、つられてボクもふり向くが、そこには先ほどと何ら変わらない無個性な黒い鉄扉があるだけだ。

「もう、何もないじゃない」

佐藤さんの言葉にボクも同意する。しかし飼い主に睨まれてちょっと怯んだような顔をしたゴン太は、すぐに「○村、後ろ後ろ！」というようにまた吠えた。仕方なくまた振り返り……………。

「……おや？」

「ほえ？」

「あれ？」

ボクらは、閉じたままの扉の真ん中辺りから、肩口まで体を突き出した半透明の女の子を見つけた。

「誰かと思えばイツキじゃん、久しぶりー」

「……………ミユキ？」

というか、ボクの知り合いだった。

2

およそ三年ぶりに会うミユキは何故か半透明になっていて、物にも触れなくなっていた。

「裏にあるトイレの窓が開けばなしになってるから、そこから入って」

と言われて何とかウチダ君の家に招かれたボクらは(ボクがトイレから入って玄関のドアを開けた)リビングに案内されるや「お茶は上の戸棚にあるから、お湯はポットのを使って。湯飲みは緑と黄色がお客様用だから」と、イマイチもてなされているのか使われているのか分からない歓迎を受けた。

ソファに座って茶をすすり、玄米の香ばしい匂いを嗅ぎながら、ボクはゴン太と戯れる(なぜかゴン太とは触れられるらしい)ミユキを見た。

三年前。転校という突然の別れに動揺していたボクとウチダ君の仲を取り持ってくれた、冬に住まう不思議な少女。体が半分透けているのは、今が夏だと言うことが関係しているのだろうか。それに、あの頃より二、三歳成長しているようにも見える。あと言葉遣いも変わったというか、何だか色々と違う。

「え〜っと、髪切った？」

「雰囲気が変わったのは認めるけど、残念ながら髪は切っていないわ」

ばっさりだ。なんで大事なところが変わってないんだ。誰か注意する大人はいないのか。

「すっごく綺麗になったよね。あと、なんだか、儂い感じ」

いや、佐藤さん。透けててフワフワ浮いてることを儂いとは言わないと思う。……それとも彼女には本当にそう見えているのだろうか。

「……それで、ウチダ君はどこにいるの？」

ずず、と茶を飲み干すと、単刀直入にボクは訊いた。ミユキはゴン太をなで回すのを止めて、真剣な顔でボクを見て、言った。

「――もういないわ、あんな奴。この世界のどこにもね」

冗談を言っているようには見えなかった。

ストンと胸に突き刺さった矢が、じわりと血を滲ませるように僕の体から自由を奪い、ついには湯飲みが手から滑り落ちる。その一方で、飲み干してるから大丈夫、などと頭は冷静に自分を俯瞰している。その一方で、「……え？」としか呟けない自分がある。

回想される「助けてくれ」、という短い手紙。遅かったのか。ジンギスカン、食べてる場合じゃなかったのか。

「もう、いないの」

ミユキがポツリと繰り返す。落ちた湯飲みがボクの足の上で跳ねた。痛くも何ともなかった。のに、視界がよどみ、スゥと遠くなる。

…………キモチワルイ。

「イツキくん、大丈夫？」

温かさ、優しい香りが僕を誘う。佐藤さんが、優しくボクの手を包んでくれている。

「……どうして、オレ」

何も出来なかったんだろう。どうすれば良かったんだろう。これから、どうしたら良いんだろう。

「佐藤さん、オレ」

「大丈夫。大丈夫だよ」

いったい何が、大丈夫なのだろう。

迷う視線の中で、ミユキがボクを見ていた。その顔は苦しそうにも、苛立っているように見える。

「…………ミユキ」

――ガチャ、ドタドタバタ。

「ただいまー。って、うおっ、イツキじゃん。なにしてん、つーかどうやって入ったの!？」

…………あれ?

「え、何してんの、つーかお前が何してんだよ!」

お前が呼んだんじゃないか。つーかいるじゃん! 生きてんじゃん!

「ちえ、帰ってくるの早くない?」

「……あれ、どゆこと?」

「どういう事も何も、見ての通りよ」

悪びれもしないこの娘は何だ。

「コラ、ミユキちゃん！ おねーさん吃驚したよ」

「いたっ。ごめんなさいー」

「あ、佐藤さんお久しぶりです。ゴン太も」

「久しぶりー。もう、いまミユキちゃんがねー」

「また何かやったんですか？」

「もう、ほんとにねー」

「ごめんなさいー」

.....足、痛いなー。

ていうか、キャラ違いすぎないきゃ？

3

軽く人間不信に陥ったボクが、信じられるのはお前だけだとゴン太と戯れていると、何やら積もる話も終わっただけらしい。

「イツキ、ちょっと」

肩を叩かれ、促されるままに歩いて行くと、趣味の悪いヒトデの形をした麦わら帽子を渡された。

「かぶっとけ。今日は陽が強い」

「これ形的に意味なくね？ っていうか何で外行くの？」

言いながらも一応かぶる。それを見もせずに、ウチダ君は台所の横にある、裏口からさっさと外へ出た。自分は坊主のままで。仕方ないので、てきとうにサンダルを借りて後につづく。東京とは違う、どこか涼しげな夏の日差しが肌に心地よい。

裏口は車で来た道からは見えなかったが、周囲と同じで見事に何も無い。青々とした草原が広がっているだけだ。.....ただ、一つを除いて。

「これを見せたかったんだ」

言いながら、ウチダ君がソレに手を乗せる。ソレはどこかで見たような、赤いバケツをかぶった雪だるまだった。

「溶けない雪だるま。ニュースで見ただろ？」

「新聞でなら。でも、溶けたって言ってたけど」

「違う。オレが盗んできたんだ。保管してあった場所には代わりに水巻いてきた」

誰も気付かないでやんの。とウチダ君がうすら笑うと、可愛らしい小さなバケツに手を載せて、ボクをじっと睨んで、言った。

「これが彼女だ」

「――は？」

意味が分からない。なのに、胸がぎゅっと痛んだ。胃かも知れない。

「この雪だるまが、ミュキの本体なんだ」

いや、意味わかんねーっつーの。とは、言えなかった。ウチダ君の悽愴な顔がプレッシャーだった。

「彼女は消えかけていた。罪を償い、勤めを果たして。ボクはそれを止めるために、罪を犯した。かつての彼女と同じように」

「……ウチダ君。相変わらず君の話はさっぱり分からないよ」

小学生の頃からまるで進歩がない。でもボクは違う。経験値が蓄積されている。レベルが上がっているのだ。

「つまり君は、また一人で勝手に悩んで一人で勝手に解決したんだね？」

「そ、そんなことないって。だから君を呼んだんじゃないか」

じっと、嘗め回すように見るとウチダ君は大きく伸びをしながら空を見た。

「太陽がいっぱいだ」

「一個しかねえよ」

いや、そういうことじゃなくて。小さな声で言いながら、ウチダ君が窺うように僕を見た。意地悪の気持ちで今度は僕が太陽を見た。

「……怒ってる？」

「怒っちゃいない。ただ呆れてるんだ」

「……君を巻き込むわけにはいかなかった」

「僕は構わなかった」

「そうじゃないんだ。君を、君まで物語にしたら、語り継ぐ人がいなくなってしまう。それは避ける必要がある」

ウチダ君に視線を戻すと、彼はじっと雪だるまを見つめていた。慈しむように、懐かしむように、とても大切そうに。

「僕にはもう、彼女が見えない」

ウチダ君が僕を見た。僕も見た。冗談を言っているようには見えなかった。ミュキが『あいつは、もういない』と言った言葉が思い出された。

「だから、君を呼んだんだ」

4

「ボクは罪を背負った。彼女を消さないという罪を。だからボクは二度と彼女には会えないし、彼女もボクには会えない。夏と冬の物語は決して同時には訪れない」

だろ？ と、おどけるように言った顔を、僕は殴れなかった。かといって、何も言えなかった。相変わらず、話がさっぱり分からない。ただ、どうやらコイツがヒドく遠い所に行ってしまったのだ、という事だけは理解しなければいけないようだった。

「この雪だるまは、今年の冬までここにある。冬になればまた元のミユキに戻る。そうしてまた、世界を巡るだろう」

「君はどうなる」

僕の質問にウチダ君はうっすらと笑う。

「ずっとここにいる。彼女は冬そのものだけど、僕は夏の一部に過ぎない。他の季節は土の中で眠って、夏になれば顔を出す。だから永遠に彼女とは会えない。それが、彼女を世界に残した僕の罰なんだ」

「相変わらず、君の話はさっぱり分からない。それじゃ、まるで君がもう人間じゃないみたいだ」

うっすら笑いながら、ウチダ君は両手を広げた。ほんの一瞬、その姿が、僕には巨大なひまわりに見えた。引き攣ったようにまた胃が痛んだ。

「君には僕のことを忘れないでいて欲しいんだ」

なぜなら、とウチダ君は続ける。

「物語は、本棚に仕舞われていても意味がない。誰かの記憶の片隅に残り、ときに語られなければどこかへと消えてしまう。そうなったら僕らは存在を失う。

僕の罪は彼女を延命させたことだ。だから、彼女が消えれば僕は消えるし、僕が消えれば彼女も消えてしまう。

ところが、彼女と違って僕の物語は君しか知らない。だから、僕とミユキのことを知っている君を巻き込むわけにはいかなかったんだ」

「分かった」

本当は何も分かっていなかった。

「君は馬鹿だ」

本当にそう思う。

「キミだって馬鹿だ。まさかこんなに早く北海道まで来てくれるとは思わなかった」

「来るさ。これからだって来る。それから伝える。彼女の話も、君の話も、僕は沢山の人に伝えるよ。いつまでも、君たちが消えないように」

「ありがとう」

僕らは見つめ合った。なんだか僕が一方向的に損な気がしないでもなかったが、どうでもよかった。もし逆の立場だったとしても、同じような話になったのだから。僕らは友達なのだから。

「イツキー、どこー」

冬のように透き通った声。僕らが好きな声。戻ろうか、と言ったウチダ君を僕は引き留めた。最後に、と言う。

「殴って良いかな」

「もちろん」

にこりと笑った顔に、僕は助走をつけて思い切りドロップキックをした。

「……殴るって言ったのに」

それが別れだった。

5

「街に帰ったら、今度は何食べようか？」

佐藤さんの運転する車の中で、僕は助手席から頭を突き出すようにして後ろを振り返った。

先ほどまでいた、黄色い家の周り是一片のひまわり畑となっていた。その陰に、赤いバケツがチラリと覗いている。

「ラーメンが良いですね。チャーシューのたっぷり入った」

彼女の為だけの、ヒマワリ畑。それでも、ここのヒマワリは冬には全て枯れてしまうだろう。冬にしか生きられない彼女に、それを見る術はないのだ。

冬が終わり、彼女がこの国から去り、夏になればまたここにヒマワリが咲く。永遠に、二人は交わることがない。織り姫と彦星だって、一年に一度は会うことが許されたというのに。

「あーいいねー。わたしバターたっぷりがいいなー」

そんな事をいつまで続けさせればよいのか。いっそ、早々に消え去ってしまった方がよいのではないか。そんなことも、思わないではない。

しかし、それでも語り継がなければならない。

なぜなら、彼はそれが罪だと言ったからだ。

罪を犯したなら、償わなければならない。罰を受けなければならない。

「……ところで、溶けない雪だるまって知ってます？」

語り継がねばならない。

いつか、罪が許される日まで。

毎年毎年、繰り返される少年の夢の話を。

いつか、また僕らが出会える日を信じて。

ラスコーリニコフのように。

罰がある以上、許されない罪も、また無いのだ。

<終>

+++++

八柳 隆三

個人サイト「新・白眉の書」

<http://bakarudhi.futene.net/>

文字のない恋文

藍川いさな



文字のない恋文

花言葉というものが、この世に存在していることくらいは知っている。だが、どの花にどんな意味があるかなんて、まったくと言っていいほど興味がなかった。

だから一番最初に知ったのは、勿忘草の花言葉だったと思う。

「私を忘れないで」「真実の友情」「誠の愛」

空色の小さな素朴な花に、そのような意味があるのだと教えてくれたのは彼女だった。

希望する美術大学の合格発表の日、真っ先に連絡をしたのは家族でもなく学校の担任でもなく、予備校の油彩科講師である池上みのりだった。

「――池上さん？」

みのりは講師控室ではなく、まだ誰もいない教室の片隅で小さなキャンバスに向かっていた。耳にはヘッドフォンが装着されているので、空太の声には気が付かない。

キャンバスと絵筆が擦れる音だけが、静かな室内に響く。部屋に沁みついたテレピン油の匂いを軽く吸い込むと、ゆっくりと彼女の元へと近付いた。

所々油絵具の汚れがこびりついた白衣を纏ったみのりは、空太の視線に全く気付かず集中しているようだ。白い頬には赤い油絵具がこびり付いているが、当然彼女は気付いていないのだろう。無造作にまとめた長い髪が、幾筋かこぼれ落ち、パレットの上に広げた絵具の色に染まっていることにも。

無意識のうちに腰を屈めると、パレットに張り付いた彼女の髪を指で掬おうと手を伸ばす。すると、みのりが弾かれたようにこちらを向いた。

「……っ！ 空太くん?!」

ヘッドフォンを慌てたように外すみのりを見て、空太は思わず笑い出しそうになる。

「いつからいたの？」

「ついさっきから」

「声、掛けてくれればいいのに」

普段は落ち着いた雰囲気ですら少々近寄りやすい印象だが、不意を突くと驚くほど幼い表情を見せる。

まさか最後の日にしようと思う今日、また拝めるとは思わなかった。空太は気付かれないよう小さく笑うと、彼女が手にするパレットを指差す。

「それより、髪の毛。絵の具付いてる」

「あ、ホントだ」

彼女は慌てもせずつまみ上げると、白衣の裾で拭き落した。

「もっとちゃんときれいにした方が……」

「大丈夫大丈夫。いつものことだから」

「すげー適当」

「うるさい」

これでよしと、汚れを落とした髪を耳に掛ける。パレットを床に置くと、今度は空太の方へと膝を揃えて向き直った。

「で、今日……どうだった？」

緊張した面持ちで、遠慮がちに訊ねる。

どうやら空太の合格発表日を覚えていてくれたようだ。もちろん、空太と同じ大学を受験する学生や予備校生は何人もいる。自分が指導していた学生の合格発表くらい覚えていて当然かもしれないが、今だけはそれを忘れることにする。

「もちろん合格でした」

途端、みのりはぱっと表情をほころばせる。

「おめでとう。よかったね」

恐らく、他の学生にも同じように言うのだろう。わかってはいるが、今は自分ひとりに向けられた笑顔だと思うと嬉しかった。

「これで私の後輩確定だね。でも残念、空太くんがせっかく同じ大学に入ってくるのに、私は卒業だなんて」

「じゃあ、留年したら？」

三分の二くらいは本気の言葉を、冗談めかして軽口に乘せる。

「残念でした。私、これでも真面目な学生だったから卒業できちゃうんだ」

それに就職も決まったしね、と嬉しげに告げる彼女の左手の薬指に華奢なデザインの指輪がはまっているのを見つける。

……ああ、そうか。

大学を卒業したら結婚をするらしいと、噂では耳にしていたから、今更驚くことではない。空太は小さく笑うと、ゆっくりと腰を上げた。

「じゃあ、俺帰ります」

唐突に話を切り上げられて、みのりは面喰ったように空太を見上げる。

「そっか。早く家の人にも報告しないとね」

「……池上さん」

「なに？」

真っ直ぐな目を向けられ、思わず息を飲み込む。

やはり、やめておこうか。一瞬迷いが走る。だがこの機会を逃したら、もう二度と逢うことも無いかもしれない。空太はなけなしの勇気を奮い立たせると、「言葉」の代わりに用意していたものをバックから取り出した。

「これ」

取り出したのは小さなスケッチブックだった。みのりの目の前に差し出すと、彼女は素直に受け取った。

「わ……綺麗」

みのりに渡したスケッチブックには勿忘草の絵が描かれていた。鉛筆で描いたもの、水彩絵の

具で描いたもの。色んな大きさでと角度で、スケッチブックを全部勿忘草で埋めつくした。

「これ、勿忘草だよ」

感心するように一枚一枚、ゆっくりめくっては丁寧に眺める。

「私、この花、とっても好きなんだ」

ひとりごとのように呟くと、愛おしむように目を細める。

どうやら、みのりはすっかり忘れていたようだ。以前、この花をモチーフとして持ってきたことを。この花の花言葉の由来を語ったことも。

「すごく綺麗。空太くん、良い絵だね」

ぱたん、と閉じて空太にスケッチブックを差し出す。しかし、空太は受け取ろうとはしなかった。

「空太くん？」

「あげます」

「え、いいの？」

「好きだって言っていたから、勿忘草」

みのりは戸惑うように空太を見つめる。

「.....憶えていてくれたの？」

もちろん憶えているに決まっている。

彼女がこの花が好きだと言ったことも。

この花が持つ言葉の意味を教えてくれたことも。

しかし空太は、彼女の問いには答えなかった。ただ静かに彼女を見つめると、床に付きそうになるほど深く頭を下げた。

「今までありがとうございました」

空太が握手を求めて手を差し出すと、みのりも応えるように手を差し出す。

「.....この絵、大切にね」

いつも見せるはにかむような笑顔。でも、その笑顔に隠された彼女の心までは見えない。

あれから三年が経った。

当時はまさか自分が、この場所で池上みのりと同じように、美術大学を目指す学生たちに指導をする立場になるうとは空太は思ってもみなかった。

みのりが大学卒業と共に、この予備校の講師を辞めた後、空太はあとを引き継ぐ羽目になってしまった。どうせアルバイトを探すつもりだったからちょうどよかったという理由もある。当初は後任が決まるまでという話だったが、ずるずると今だに講師のアルバイトを続けている。

名乗った美術大学へ現役合格。公募での受賞実績。辛辣ではあるが的確な指摘。予備校側としても、空太は客寄せパンダ的存在であるから手放したくなかったという理由もあるが、空太自身も慣れた環境でのアルバイトは気が楽だった。早い話が、互いの利害が一致したというわけだ。

時給もいい。人間関係も仕事内容も悪くはない。だが当然ここに居れば、あまり知りたくない話題も耳に入ってくる。

空太が卒業をしてから約半年後、池上みのりが結婚したという話を耳にした。あれから半年も経ったのだからもう平気だと思っていたのに、案外堪えている自分に驚いたものだ。必要以上にみのりの話を耳にしないよう、給湯室へ避難した記憶は空太にとってはまだ新しい。

大学の講義に課題、ここでのアルバイトに明け暮れた日々。忙しさに身を任せれば、感傷に浸る暇もないのはありがたかった。気が付けば季節は巡り、再び受験シーズンを迎える。

この時期はこれから受験をする学生もいれば、後は合格発表を待つばかりという学生もいるという微妙な時期だ。春休み中だから暇だろうと、空太も直前講習の講師に駆り出されていた。

狭い教室の中、ひしめき合うように自分の場所を確保した学生たちは、石膏像をまるで親の敵のように睨みつけながら、イーゼルに立て掛けた画用紙に木炭を忙しく走らせる。一切の私語も無く、ただひたすら鉛筆が擦れる音と静かな吐息。ピリピリとした緊張感で張り詰めた空気は懐かしくもあるが、もう二度と経験したくないとも思う。

空太はタイマーに目を向けると、学生たちに非情な宣告をするべく大きく息を吸い込んだ。

「お前ら、あと五分だぞ」

小さな悲鳴がいくつか上がり、さらに手を動かす音の速度と緊張感が一気に増量される。

最初の年は、去年までは自分もあの中に居たのだ……と感慨深く思ったものだが、三回も繰り返せばもう慣れた。だがあれからたった三年しか経っていないのに、ずいぶん歳を取ってしまったような気がする。いや、三年も経ってしまったと言うべきだろうか。

ピピピピーーピピピピーピピピピーー

静寂を裂くような鋭い電子音が響き渡った。作業終了の合図だ。

「はい、おしまい」

途端に部屋中に溢れる落胆の声とため息。

だが「おしまい」と言ったにも拘らず、まだ粘ろうとする学生を見つけた。空太の声も耳に入らないほど集中しているらしく、片手に木炭、片手に消しゴムがわりの食パンを握り締め、ひたすら石膏像の姿を書き写している。

「朝川」

声を掛けるがまだ気づかない。恐ろしいほどの集中力だ。しかし制服のスカートが捲れているのも気にならないというのは、女としてどうかと思う。

「こら、いい加減にしろ」

空太は彼女の背後に回ると、手にしていたノートで軽く頭を叩くと、驚いたように肩を跳ね上げた。

「あ、れ？」

きょとんとした目で空太を見上げる。驚いたように目を瞬くその姿は、小動物のようだと思う。

「時間切れ」

「牛ちゃんお願い！ あと五分だけ」

お願い、必死の形相で両手を合わせるがダメなものはダメだ。

空太はため息をつくと、彼女のイーゼルから強引に画用紙を奪った。

「わ、ちょっと待っててば！」

高く掲げられたデッサンを取り戻そうと、彼女は腕を必死に振り回す。

「ダメだ。講評始めるぞ」

「もうちょっと！」

「待ったは無し」

「なによーケチ」

不満そうな上目遣いで下唇を突き出す。可愛らしさの欠片もないその表情に、空太は思わず苦笑する。

「本番じゃ『あと五分』は無いだろうが」

もっともなことを言われて朝川は、ようやく諦めたように小さく頷いた。

視界の片隅に朝川の姿を捉えながら、空太はふと思い出す。

彼女の第一志望の大学の合格発表は、今日ではなかつたろうか？彼女から受かったとも落ちたとも報告を受けていない。もし受かっていたら、顔を合わせた途端に言い出すはずだ。

他の講師の講評に耳を傾けている朝川は、他の学生と同じように神妙な面持ちだ。これだけ必死な様子を見ると、恐らく不合格だったのだろう。

滑り止めの大学の発表も間近のはずだ。そこもダメなら浪人か、もしくは他の道を取るか。

取り敢えず、終わったら結果を聞いてみるか……。

あまり気は進まないが、これも仕事のうちだ。

空太は言い訳を頭の中に並べながら、ひっそりと嘆息した。

帰り支度を終え、古ぼけたスリッパからくたびれたスニーカーに履き替え、出入口のドアを開け放った時だった。

「牛ちゃん」

外気の寒さに身を震わせた途端、背後から少女の声が空太を呼び止めた。振り返るとまるで魔女のような裾の長いコートに身を包んだ朝川がいた。

「どうした」

講習が終わった途端に姿を消したから、もう帰ったのだろうと思っていた。青白い外灯の光に浮かび上がった朝川の頬や鼻先は、寒さで真っ赤になっていた。他の学生が出払ってから、一時間は経っている。

「もしかして、待ってた？」

あまり深く考えず訊ねると、朝川は気恥しそうに小さく頷いた。

試験の結果は他の講師の元へ連絡が行っているのかもしれないし、自分がそこまで気にすることでもないだろうと判断した途端、彼女のことはすっかり頭の片隅へ追いやっていた。

「あのね。今日結果発表だったの」

緊張のせいか、声が震えている。思いつめた表情は痛々しい程だ。

この様子では駄目だったのだろう。空太が無言で頷くと、朝川は決意を固めたように小さく深呼吸をする。

「受かった」

「え？」

予想と反した言葉に、空太は思わず聞き返す。

「わたし、受かったよ」

「……そっか。おめでとう」

空太が祝いの言葉を告げると、ようやく彼女の表情が嬉しそうにほころんだ。

「青い顔しているから、正直駄目だって言うと思った」

「え、わたしそんな顔してた？」

「うん、今日も死にもの狂いでデッサンしてたから」

「うわー」

自分でも多少自覚はしていたのだろう。朝川は「最悪」と呟きながら恥ずかしそうに頭を抱える。空太は軽く笑い声を立てると、目の前にある朝川の小さな頭をぽんぽんと軽く叩いた。

「今日で直前講習も終わりだし、入学するまでゆっくりしたいところだろうが、少しは手を動かしておけよ」

「……うん」

大きな十字路に差し掛かると、どちらともなく足を止めた。

「じゃあ気を付けて帰れよ」

停留所に目をやると、バスがちょうど到着しようとしていた。朝川を促すが、彼女は地面に縫いつけられたように動こうとしない。

「朝川、バス」

「牛ちゃん」

はっとするような声に、

「あのさ、卒業してからも……また遊びにきてもいいかな？」

振り絞るような声は、何かを諦めたように悲しげなものだった。

「ああ、いつでも遊びに来い」

「……ありがとう」

朝川はバックから、手のひらに収まるくらいの小さな青い封筒を取り出すと、空太に手渡した

。

「後で読んでね」

バイバイと手を振ると、まだ停車しているバスに向かって走り出した。彼女が乗り込むと、待っていたと言わんばかりにドアが音を立てて閉じる。エンジン音を立てて走り去るバスが、空太の目の前を走り抜ける。バスは瞬く間に小さくなって行った。

さっき、彼女から貰った封筒を開いてみる。中には小さなメッセージカードが入っていた。そこにはうっすらと水彩絵の具で小さな青い花が描かれていた。右端には花よりも小さな文字で「

ありがとうございました」と「朝川めぐみ」と彼女の名前が。

「この花は……」

勿忘草だ。

……まさか。

空太はバスが走り去った方向に目をやった。もう他の自動車に飲まれてもう見えなかった。

勿忘草の花言葉。私を忘れないで。

三年前、池上みのりに送った絵のことを思い出した。

彼女はどんな思いで、空太が描いた絵を受け取ったのだろうか。自分の思いは届いていたのだろうか。

<終>

+++++

藍川 いさな

個人サイト「くじら缶」

http://kujira_can.web.fc2.com/

でじたる紙ふうせん ～花の巻～

<http://p.booklog.jp/book/37862>

著者：紙風船工房

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/paperballoon/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/37862>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/37862>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.